
緑青吹雪

楓岱

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緑青吹雪

【Nコード】

N5064F

【作者名】

楓岱

【あらすじ】

謎に包まれた殺人事件と身勝手な遺棄事件　二つの因縁が染みこんだ『峠』と呼ばれる場所がある。時の闇に埋もれた記憶が、突如アオイに牙を剥く。

序（前書き）

この作品はフィクションです。登場する人名、地名、団体名などは
実在のものとは一切関係ありません。

序

『峠』と呼ばれる場所がある。国道のバイパスに程近い旧道をそう呼んでいる。鞍部の近くには昔地藏堂があつたらしい。今でも石段と礎石が残っていて、最近公園として整備された。

竹藪や広葉樹が鬱そうと生い茂る未舗装路で、付近に民家は無い。生糸が主要な輸出品だった時代には、産地と港を行き交う商人達に利用されていたが、時代の移り変わりと共に埋もれていったらしい。地元の古老の中には『オカイコ道』と呼ぶ人もいる。その『オカイコ道』は順当に行けば、ごく在り来たりな史跡として扱われるはずだった。しかし、道にとって少々困った事件が起きた。二度もある。

最初の事件は終戦直後にあつたらしい。当時はまだ、峠に小さな地藏堂があつた。何時の頃からか、そこに堂守を買って出た流れの女修験者が住み着くようになった。そんな折、地藏堂が半焼する事件が起きた。古老が語るには、青白いキツネ火が出た、と大騒ぎになったという。キツネ火を目撃した男は精神を病み、最後は狂い死にしたと聞く。

焼け跡からは老婆の死体が発見された。当局は死因を『失血死』と断定した。首から上が見つからなかったのである。物取り目的の犯行とされたが、しかし、調度品にも事欠く生活をしていたのに、そう誰もが疑問を抱いたが、それ以外に考えようが無かった。結局物証も無く、容疑者も浮かばず、事件はお宮入りとなった。堂守もいなくなり、以前にも増して人の寄りつかなくなった地藏堂は、焼け落ちたまま虫の寢床となっていた。人々は、何時しか地藏堂の跡を単に『峠』と呼ぶようになった。

二度目の事件は、今から30年前に遡る。ある高校教師の遺書が発端となり、事は明るみに出た。男は己の罪を償うために、マンションから身を投げていた。遺書には妻や子供、そして生徒達への謝

罪が綴られていた。彼は告白する。人を殺してしまった事を。か細い首を絞め、少女の前途ある将来を踏みにじった事を。最愛の女性の命を自らの手で絶ったのである。直ちに当局は捜査に入った。被害者は失踪中の教え子。それは、関係者の証言からも明らかだったが、肝心の遺棄現場は、遺書にも記されていなかった。捜査は難航した。

事件が迷宮入りしかけた頃、奇妙な噂話が囁かれるようになった。『峠』で被害者の少女の姿が目撃されたのである。それも一度や二度では無い。

ある目撃談によれば、小雨の降る夕暮れ時だったらしい。犬の散歩をしていた目撃者は、石段をとぼとぼ登っていく少女を見かけた。不審に思った目撃者は後を追ったが、登った先の地蔵堂跡には人の姿は無い。突然、犬が背後に向かってうなり声を上げ始めた。何かが居る。目撃者は振り向く事が出来なかった。気配は徐々に近づいてくる。そして、消え入るような声で告げたという。

「カラダを返して」と。

捜査の結果、白骨化した遺体が『峠』の斜面から発見され、歯形から少女であると確認された。その後すぐに慰霊碑が建てられ、炭化した地蔵堂は撤去された。

上（前書き）

この作品はフィクションです。登場する人名、地名、団体名などは
実在のものとは一切関係ありません。

上

東向きの窓から朝日が降り注いでいる。六畳一間のアパートには申し訳程度のキッチンが付いている。本で埋め尽くされた部屋の隅に、これまた申し訳程度のベッドがあり、アオイはそこから這い出して窓を開けた。

心地よい空気を期待していたが、見事に裏切られた。湿った風が全身をなで回し、朝から不快指数を跳ね上げる。アオイは汗で濡れたＴシャツを脱いだ。

部屋の下は『畑下』というラーメン屋になっている。店の前をちょうど奥さんが掃除していたので、アオイは声を掛けた。近辺では評判の店で、アオイもだいぶ世話になってきた。摂取したチャーシューや味玉は、腹周りに居座ったらしく、最近ジーンズがきつくなってきた。それなりの危機感はある。いや、危機である。

そんな事もあり、アオイは長年苦楽を共にしてきたバイクを手放した。代わりに大枚を叩いてマウンテンバイクでも買おうかと思ったのだが、壊れたパソコンの修理にまわってしまい、でかい荷台の付いたボロ自転車を買ってもらい仕方なく乗っている。そしてその荷台は、何時の頃からか野良猫の寝場所になっていた。毎日懲りずに寝ている猫を、これまた毎日追ひ払う。もはやルーティンである。猫は鬱陶しそうに薄目を開けて、歩道を歩いていき、そして一度振り返り、不貞不貞しい顔をして路地に消える。それを見届けて、アオイは大学に向かうのである。

アパートから大学まで１キロ程ある。５分もあれば余裕で着く距離だ。が、何とも悩ましいのは急坂である。毎日バイク屋の前を通るのだが、そのたびに愛車の事が脳裏を過ぎる。たまに店員と目が合つと、新車を勧められる。それ以上に並んだバイク達からの熱い視線を感じずにはいられないが、現状ではそうも言っていられない。川を渡った所の停留所で、アオイはバスを追い抜いた。学部生の

頃には無かったが、最近出来た。駅前までの利用客を詰め込んだバスは、あつという間にアオイを追い越していく。この辺りもかなり開発が進んで人も増えた。歩きだと、丘の上にそびえる大学の構内を抜けても、駅まで20分はかかる。駅前の駐輪スペースには限りがあるから、路線が新設されたのだろう。大学の裏門前にもバス停は出来たが、利用している学生を見た事は無かった。

S字の急坂を登りきってアオイは一息ついた。これだけの運動を毎日してるのに、体型が改善されないのは一体どういう事か、と考えても仕方ない。ハナミズキの街路樹が並ぶ歩道から、アオイは構内に入った。

研究室のドアにはボードが掛けてあつて、部屋の住人の所在が一目で分かるようになっていた。黄金週間のおこぼれに与った土曜である。ほとんどの院生は『帰宅』もしくは『フィールド』にいる事になっている。出来ればアオイもそうしたかったが、資料の整理をしなければならなかった。今日は一日中モニターとにらめっこだろう。接触不良のカードキーにいらつきながら、アオイはそう思った。五度目でようやくドアが開き、入ろうとして呼び止められた。指導教官のヤナギだった。

「アオイ君、ちょうどよかった」

土曜なのに随分早いなと、アオイは思った。まだ9時前である。挨拶をすると、ヤナギは無精ヒゲを撫でながら頷いた。どうやらいつもの徹夜コースだったらしい。そろそろ停年だというのに、どこまでも忙しい人だ。しかし、一体何の用だろうか。アオイは何となく嫌な予感がした。蔵書の整理か、講演の準備の手伝いか……いずれにせよ、下手に首を縦に振ってしまうと、一日が終わってしまう。「実は今日の個人ゼミの件だけだね」

マズイ。これは実にマズイ。アオイは内心冷や汗をかいた。完全に忘れていた。準備すらしていない。

「急な教授会が入ってしまったね。来週に延期くれないか？」

アオイは残念そうな表情を浮かべて了承し、部屋に入った。全く

朝から心臓に悪い。ろくな一日にならなそうだ。ただ、妙だった。土曜の朝に会議なんてやるはずがない。そうは思ったが、アオイが気にしてもしょうがない事だった。

八雲大学に入って6年になる。今年で修士課程も終わる。考えてみれば、このキャンパスに相当な年数、居座っている。過ごしにくいのも多々あるが、住めば都な部分もある。

都心から電車で40分。ニュータウン開発のフロンティアに位置する郊外。確かに環境は悪くない。美味しいラーメン屋もある。しかし、絶対数、商業施設が足りない。あるにはあるが、物足りない。週末ともなれば、家族連れやカップルでこった返すショッピングモールに、金も車も女も無いが、暇だけは持て余している学生なぞ用はない。駅前のアウトレットモールなど、その最たる空間である。

合コンでは、毎日買い物出来ていいねー、といった話になったりする。その場は笑って流すのだが、内心は毎日服やら靴やらを見に行くバカがどこにいろのかと、アオイはいつも毒づいている。ウィークデイに必要なのは、肉屋の揚げ立てコロッケだったり、物思いに耽る事が出来る居心地のいい喫茶店だったり、安くて美味しい定食屋だ。それをニュータウンに求めても仕方ないので、やむを得ず学生食堂を利用する毎日である。

昼時の食堂はいつも最悪な混み具合を見せる。しかし今日は土曜、平和である。これから梅雨にかけて蒸し暑くなっていくが、それに合わせて人口密度も低下する。五月病を発症した新入りや、授業に絶望した常連の足が大学から遠のくからである。全く上手くできていると、今年もアオイは思う。

トレーをぶら下げて、顔見知りのおばちゃんの前に立てば、言わずとも自動的に料理が出てくる。何時からか、そんな仕組みになってしまった。もう、期間限定特別メニューですら感慨は湧かない。味のベースは皆同じという事に、幸か不幸か気付いてしまった。6年も食べ続ければ、飽きを通り越してある意味中毒とも言えるのだが、それよりも最近は何の楽しみがあって足を運んでいる。

ルリは今日レジ当番らしい。アオイは表情を引き締めて、行列の出来ているそのレジに並んだ。横のレジはがら空きで、突っ立っているおばちゃんはこちらを睨んでいる。が、そんな事はおかまいなしだ。

ルリは行列が出来て当然の美人だ。烏色の長い髪をポニーテールにしている。それが白い肌に映える。全くもって個人的にツボである。彼女の顔を見るようになったのは、今年の4月からだ。聞くところによると、18歳らしい。まだまだ射程圏内、のはずだ。

ルリは今日も微笑を浮かべて釣り銭を渡してくれた。これだけのために大学に來ているといってもいいくらいである。ルリに魅せられた学生は少なくないが、その全てが儂く散っていったと聞く。そんな中、何某とかいう経済学部の人チャラチャラしたのがしつこくつきまといていたが、最近見かけなくなった。大方、大多数の学生よろしく、大学に寄りつかなくなったのだろう。

いつもの窓際の席でぼんやりと外を眺めながら、鳥の唐揚げを摘んでいる時だった。食堂内の空気が固くなっていくのに気付いた。何気なく見回すと、壁際の席にスーツ姿の男が座っている。いくら学食とはいえ、スーツが珍しい訳ではない。異様なのは男の纏う空気である。周囲にある種の緊張に染めている。

その男と目が合ってしまった。本能的に関わり合いになりたくないと感じたが、時既に遅し、のようだ。男はマジマジとこちらを見ている。そして、トレーを手にすると、あろう事か近づいてくる。

アオイは慌てて外に目を遣った。

「アオイ？　だよな？」

聞き覚えのある声だった。よくよく顔を見ると、確かに懐かしい。俺だよ！　中学まで一緒だった　」

「……酒屋のカエデ！」

彼は変わらぬ笑顔を浮かべて隣に座った。

「酒屋じゃねえ。コンビ二だって、何回言や分かるんだよ、お前は」
「久しぶりだな！」

カエデとは幼なじみである。というより、悪友と言った方が相応しい。物心ついた頃から一緒に、遊ぶ時は常に隣にいた。ろくでもない事も多々しかしたが、今では良い思い出である。アオイはそういう事にしてある。

「こんな所で再会とはね。せっかくだから、場所を変えないか？」

「悪い、仕事中なんだ」

言われてみれば、カエデは何故こんな所にいるのだろう。どこぞの研究室に出入りしている業者に見えなくもないが、この雰囲気である。アオイの胸の内を読んだのか、カエデは無言で名刺を差し出した。見覚えのあるマスコットと警、視、庁の3文字が目飛び込んできた。

「お前……刑事になったのか？」

カエデは黙って頷いた。それでこのオーラという訳だ。名刺をよく見ると組織犯罪対策第五課とある。

「刑事つても、薬物絡みの部署だけだな」

「……いや、しかし、お前が警官って……何かが違うんじゃないのか？」

「まあ、分かるよ。言いたい事は」

「で、その刑事さんが、ウチの大学に何の用なんだ？」

カエデは急に真顔になると、指でテーブルを叩き出した。昔から重大な打ち明け話をする時、この癖が出る。

「大麻絡みでちよつとね。売人グループの主犯格が、ここの学生らしいんだが行方不明。関係者に話を聞きに来たって、よくある話だ。よくあっちゃ困る話だが、なるほど、朝一の教授会はこの件が原因らしい。」

「被疑者はカツラって男だ。何か心当たりはあるか？」

カツラ。どこかで聞いた名前だ。思い出そうとして傾げた首は、レジの方を向いていた。相変わらずルリはレジで笑みを浮かべている……

「思い出した！ あの子につきまたってた男だ！」

アオイがレジを指さすと、カエデは頭を掻いた。

「らしいな。彼女にも話は聞いてみたが、手掛かりは無しだ」

そうか、カツラか。最近見かけなくなった裏には、のっぴきならない理由があるらしい。

突然、某刑事ドラマのテーマ曲が鳴った。カエデの携帯だった。

いくら何でもその選曲は如何なものかと言おうとしたが、先に電話に出てしまった。

「は？ 何が見つかったんです？」

二言三言、電話先の相手に告げて、カエデは電話を切った。

「ついでだからお前の意見も聞いてみたいんだが」

アオイは頷いた。

「先日、カツラの部屋に踏み込んだんだ。しかしもぬけのからだった。というかな、まるで何年も人が住んでなかったような状態だった。ところが、何一つ手掛かりが無かった部屋から、妙な物が見つかったらしい」

そう言ってカエデは携帯をしまった。

「何が見つかったんだ？」

「生糸だよ」

「……シルクって事か？ 絹製品が好きだった……？」

「いや、そういった衣料類は見つからなかった」

意味が分からない。カエデも肩をすくめている。

「趣味で蚕でも飼ってた……とか？」

冗談半分で思いついた事を言ってみた。いやいや、とカエデが手を振る。確かに、カツラはいそいそと桑の葉を摘みに行くようには見えなかった。

「奴にとって大事なものは、クワよりアサの方だ」

そう言ってカエデはレジの方を向いた。眉がひくついている。これも昔から変わらない。内心得意な事をやらかした後は、決まってこうなる。久しぶりに見たが、妙に腹立たしい。

「彼女。どっかで見た事ある気がするんだよな」

真顔に戻ったカエデが呟いた。

「何だよ、仕事中にナンパする気か？ 職場に苦情の電話入れるぞ」
はいはい、と言いなながらカエデは席を立った。

「今度飲みに行こうぜ。歌舞伎町にイイ店があんだよ」

何だか訳ありな誘いのような気もしたが、それはそれとして、アオイは連絡先を伝えた。カエデは颯爽と去っていった。朝より一層蒸し暑くなってきた。早く仕事を片づけてビールでも飲もうとアオイは思った。

噂というのは瞬く間に拡散する性質のものだが、狭い世界なら尚さらである。研究室に戻って、さくさくと作業をこなしていると、同期のツゲが飛び込んできた。時計をみると5時を回っている。この男が、土曜のこの時間に居る事自体不自然なのだが、どうやらお互い似たような境遇らしい。それを承知でベランダに連れ出すのだから、なお質が悪い。

研究棟は8階建てで、大きな吹き抜けの周りを各研究室が取り巻いている。アオイとツゲが籍を置く、環境科学科は最上階に陣取っている。最上階のベランダからは、天気が良ければ富士山が見えるのだが、今日はいにく叶わない。パイプイスに腰を落ち着けたツゲはタバコに火を着けた。

「大変な騒ぎになってきたぜ、おい。上の方は対応で大わらわらしい」

「そりゃそうだな。大麻取締法違反の上に被疑者は行方不明。高飛びでもしたのかな」

「警察に知り合いがいるんだって？ そこら辺詳しく聞かせてくれよ」

どこでそれを聞いてきたのか知らないが、カエデから聞いた事をかいつまんで話した。

「何だよ、その程度か。こっちはもつとすごいネタを仕入れてきたんだぞ？」

別に需要は無いが、聞かないと終わりそうにない。

「学内で栽培してたらしいぞ？ ワイドショーネタ間違いなしだ」

「……マジでか？ そりゃ大事じゃないか」

「多分裏の斜面のどこかだろ。どうだ、探しに行ってみないか？」

さすがにそれは丁重に断った。下手に動いて藪から蛇を出したくない。あつさりと引き下がると、ツゲはさらに喋り続けた。

「俺が思うに、カツラはもう消されてるな。今頃この夕日を東京湾の底で拝んでるんだろな。奴は開けちゃいけないパンドラの箱を」

「

「何言ってるの？ ていうか、今日曇りだし」

「いやいや、アオイ君！ こりゃ十中八九間違いないって！ 行方不明になったヤクの売人の末路ったらこれしかねえって！」

「……忙しいからまた今度な」

部屋に戻ろうとするアオイをツゲは慌てて引き留める。

「待てって！ 話はこれから面白く」

「いや、面白くしなくていいから。テレビ見過ぎだから、お前。お母さんに言われなかった？ テレビは一日二時間までだよ」

「よし、わかった、こうしよう。晩飯おごる。ラーメン食いに行こう」

「……またか。貸した金は現物じゃなくて、キャッシュで頼む」

「そう言わずに！ ささ、参りましょう。どの店に致しましょうか？」

ツゲに背中を押されて部屋へと戻る。結局作業は捗らなかったが仕方ない。時間も時間だし、あきらめて飯を食いに行く事にした。

「『円』に行こうぜ？」

「えー？ 今日はガッツリ豚骨系な気分なんですけど。『畑下』にしようぜ」

「じゃあ聞くなよ……てか、またかよ」

「それに『円』って『峠』の近くだろ？ あそこはあんま行きたくねえんだよな。気味悪い。この前テレビでもやってたしな。見た？」

そう言えば深夜のオカルト番組でやってた。気味悪いと言いな

がらも、ツゲは目を輝かせている。どうやら『畑下』までこの話題で盛り上がりたらしい。どうにも盛り上がるとは思えないのだが……

中（前書き）

この作品はフィクションです。登場する人名、地名、団体名などは実在のものと一切関係ありません。

それからしばらく、学内はマスコミらしき人間の徘徊が続いた。

有名リポーターにインタビューを受けたとかどうかで騒いでいる呑気な輩もいたが、全体的に見てそれほど動揺は無かった。メディアでも連日のように取り沙汰されていたが、それも5日程で、世間の関心は新しいスキャンダルや国政、金融の動向に移っていった。アオイの日常も変わらない。朝起きて猫と格闘し、資料の整理やゼミの準備に追われ、夜は夜で仲間と酒を交わす日々である。変わりあるとすれば、ルリの姿を見かけない事だった。おばちゃんから聞き出した情報によると、体調を崩して寝込んでいるらしい。一大事ではあった。しかし、アオイにはどうする事も出来なかった。

アオイの部屋で飲みながら、ツゲは断固見舞いに行くべきだと主張した。ここで行かなきゃ男が廃るとか何とか、訳の分からないくだを巻いている。どこに住んでいるかも知らない相手にどうやって？ 親しくもないのに押し掛けるのは非常識だと、酔っぱらい相手に言い聞かせている、当のアオイも相当酔っている。二人して意味不明な議論を展開し、夜が更けていく。

目が覚めて最初に飛び込んできたのは、焼酎のラベルだった。何時帰ったのか、ツゲの姿は見当たらない。飲み散らかしたまま居なくなるのは、今日に始まった事ではないので気にもならない。適当にゴミを片づけて、アオイは遅い朝食を取った。

初夏の日差しが網膜に突き刺さる。久々に爽やかな天気である。アオイは自転車にまたがってあてもなく走り出した。遠出をするには遅すぎる。かといって近所でウダウダ時間を潰すにはもったいない。

久しぶりに都心にでも繰り出すかと思った矢先だった。川沿いの遊歩道の縁石に腰掛けて、俯いている女性がいる。傍らにパンクした自転車が倒れている。帽子で隠れて表情は分からないが、酷く辛

そうに見えた。一度通り過ぎたものの、このままだとさすがに目覚めが悪い。アオイは引き返して声を掛けた。彼女はゆっくりと顔を上げた。血の気の失せた顔は透き通るように青白い。ルリだった。

アオイが八雲大の学生だと名乗ると、ルリは微かに微笑んだ。

「大丈夫？ 救急車呼ぼうか？」

ルリは無言で拒否した。ひとまず近くにあったベンチに彼女を横にして、アオイは水を買いに走った。戻ってくると、ルリは起きあがって、辺りを見回していた。水を飲ませると、少し楽になったように見えた。

「私大丈夫ですから。お忙しいのにごめんなさい」

「いいんですよ。暇を持て余して所だったし。でも、大丈夫？ 貧血か何か？」

アオイの顔を改めて見ると、ルリはクスクスと笑いだした。

「あの ウラ定食の方ですよね？」

何気なく食べていた昼食。どうやらあれは特別メニューらしい。初めて知った衝撃もさる事ながら、その程度の認識だったとは苦笑いを浮かべるしかなかった。

「環境科学科のアオイといえます」

血の気が戻ってきた笑顔で、ルリは頭を下げた。いつもの笑顔である。それを見て、アオイは安心した。

「アオイさんって人気あるんですよ？ 栄養士のおばさんとかいつも噂してます。あの定食はアオイさん専用メニューなんですから」
非常にありがたい話なのだが、さすがに射程圏外のボール球はフルスイング出来ない。いや、したくない。もし当たってしまったらえらい事だ。しかし、そんな考えはおくびにも出さず、アオイは相づちを打った。ルリは腕時計を見て立ち上がるうとしたが、へなへなと座り込んだ。

「無理しない方がいいよ。病み上がりなんでしょ？ 用事があるなら送って行こうか？」

「大丈夫です。家に戻るだけですから」

ルリの家は国道のバイパス近くにあるらしい。ここから歩くと、ゆうに20分はかかる。彼女は自転車がパンクしているのに気付いて呆然としている。

「遠慮せずに後ろ乗りなよ。自転車はとりあえずここに置いて、今度取りに来たらいいんじゃない？　今は家で休んだ方がいいと思うけど」

ようやく、ルリは首を縦に振った。

今日はついていると言わざるを得ない。ルリを乗せながら、アオイは神に感謝した。偶然とは言え、ルリと休日を過ごしているのだから。背中越しにルリが話しかけてくる。買い物の途中でパンクして倒れてしまった事。今日は昆虫学者の父親が出張から帰ってくる事。相づちを打ってはいたが、全て上の空だった。ルリに自分の鼓動が伝わってしまうんじゃないか、アオイはそればかり気になっていた。

川沿いの道をゆっくりと走る。のどかな色彩が後ろへと流れていく。次第に民家はまばらになり、水田の方が多くなってきた。真っ白いサギが、代掻きしたての田圃で餌をついばんでいる。道は段々と上っていった、資材置き場や雑木林ばかりになり、人家は行き止まりの一軒だけになった。立派な生垣のある、昔ながらの屋敷である。門柱に『タチバナ』とある。飲み物くらいしかないけれど、よかったら　という、ルリの言葉に甘えて、アオイは敷居を跨いだ。母屋の前に広い庭がある。奥に土蔵が見え、檜やコナラの中木が囲んでいる。南側の日当たりのいい一角には小さな温室があった。

「父が飼育している昆虫がいるんですよ」

ルリが言った。そういえば、さっき父親の話をしていた。

「どこかの大学にでも勤めてるの？」

「動物園です。昔はよく連れて行ってもらったけれど」

そう言いながら、ルリは温室に歩いていく。温室の中はさらに暖かかった。大きなアゲハチョウがひらりひらりと飛んでいる。大小様々なケースが並び、大きな水槽も見える。水棲昆虫でも飼育して

いるのだろうか。甲虫や蝶の幼虫を眺めていると、アオイの足に何か引つかかった。立て掛けられていた筈がゆっくりと倒れていく。その先には

空き容器のひっくり返る音が温室内に響いた。アオイは慌ててケースを拾い上げた。幸い割れてはいないらしい。目を丸くしたルリが駆け寄ってくる。

「大丈夫ですか？ 怪我してませんか？」

「ごめん……つい夢中になっていて」

大失態だ。もし、虫の入ったケースを落としていたら……いや、よかった。空のケースで本当によかった。ケースを戻そうとして、アオイは地面に落ちているカードに気付いた。八雲大学のマークが見える。学生証 カツラのものであった。

「あの人の学生証、そんな所に落ちてたんだ！ 探してたんです」アオイの手から学生証を抜き取って、ルリはニコリと笑った。

庭に面した客間からは、温室がよく見える。開け放たれた窓から、心地よい風が吹き込んでくる。カツラとルリが付き合っていたとは思ってもよらなかった。仄かな期待を抱いてだけに、大打撃である。

しかし カツラは恋人を残してどこに姿を眩ましたのだろうそうだ。今、彼女は独りぼっちじゃないか。よく考えてみたらチャンスだ。恋人に欺かれ傷心のルリにそつと寄り添い、やがて

ルリがコーヒーを持って入ってきたので、アオイは顔を引き締めた。

「何だか居心地のいい家だね。風が流れるように巧く造つてあるみたいだ」

「そうでしょ？ 私も結構気に入ってるんですよ。古いけど、そこがまたいいってどうか」

ルリは庭の方を見ている。

「この辺りも好きで、私よく散歩するんですよ。アオイさんは『峠』に行った事ありますか？」

「散歩……『峠』に行くの？」

「そう。昔、殺人事件があった場所。あそこも落ち着くんです。だから私ここから離れられなくて。今はもう地藏堂の礎石しか残っていないけど、昔はまだ焼け焦げた柱とか残ってたんだよ?」

アオイは何も言えなかった。

「散歩しながら考えるの。何故彼女は殺されたんだろう。どうして彼女の体はなくなってしまったんだろう。彼が裏切ったのは何故、って」

ルリがゆっくりと振り向く。口元に僅かな笑みを浮かべているが、目は 目は笑っていなかった。それは誰かに対する非難が込められているようだった。

「警察に色々聞かれたんだね? カツラ君の件」

「どうして……知ってるんです?」

ルリはコーヒークップを静かに置いた。

「警察に知人がいて、そいつがたまたまカツラを追っていて、固くなっていたルリの顔が徐々に解れていく。と、同時に何とも言えない寂しそうな眼差しで、彼女は再び庭を見た。

「……大変だったね」

「彼にそんな事が出来るはずないです」

そう言い切った彼女を、アオイは健気だと思った。

「連絡とかは全く」

「ありません。元々あまり連絡くれない人だったから」

……あの野郎。まさか他にも女が

「刑事さんにも聞かれました。最後に直接会ったのは失踪する直前だったって話ですけど……彼、失踪なんてしてません」

「……どういう、意味かな?」

「すぐ側に居ますよ」

彼女はごく自然に喋っている。確かこの前、カエデは『手掛かりは何も得られなかった』と言った。

「……それは警察に話してないよね?」

「はい。聞かれませんでしたから」

どうやらきな臭い話に首を突っ込んでいるらしい。カエデに連絡を取ろうと、携帯に伸ばした手が止まった。彼女は……カツラの共犯者なのだろうか？　すぐ側に居ると言った。という事は、今この場で電話を掛けたら、非常にまずい展開になるかもしれない。

「でも……説明してたとして解ってもらえたかどうか……他人には見えないから」

アオイは即座に理解できなかった。いや、考えれば考える程わからない。

背後で人の気配がした。アオイの後ろに向かって、ルリが微笑んだ。それを見て、アオイは生唾を飲み込んだ。

「お父さん、お帰り。早かったね」

恐る恐る振り向くと、白髪の男が立っている。タチバナは無表情のまま、持っていたバットを振り下ろした。鈍痛が全身を貫き、次の瞬間、アオイは畳の縁を見つめていた。そしてすぐに目の前は黒く塗り潰されていった。

下（前書き）

この作品はフィクションです。登場する人名、地名、団体名などは実在のものと一切関係ありません。

下

意識が戻ってから、しばらく頭が働かなかった。時折襲ってくる痛みもさる事ながら、あまりの状況の変化に頭がついてこない。明り取りからオレンジ色の陽光が差し込んでいて、お陰で少しは様子がわかる。鉄扉には外から鍵が掛かっているらしく、びくともしない。大声で助けを求めてみたが、反応は無かった。カビ臭い空気。冷たい土間。察するに土蔵の中だろう。どうやら、最悪の方向に話は向かっているらしい。

ルリはカツラを隠している。他人には見えない場所で、すぐ側にいる、と彼女は言っていた。この敷地の中で、他人がそうそう立ち入らない場所と言ったら、真っ先に思い浮かぶのはこの土蔵だ。しかし、誰かが息を潜めている気配はない。仮にここに匿まっているとして、わざわざ同じ場所へ秘密を知った人間を閉じこめるだろうか。多分それはあり得ない。じゃあ一体どこに　いや、それよりもこれからどのように扱われるのだろうか……しなくてもいい想像をして、鼓動が早まってきた。パンドラの箱を開けたのはこっちも同じらしい。とにかく、何とか逃げなければ

アオイは明り取りを見上げた。タンスを引っ張り出せば何とか届く高さだが、あいにく頑丈そうな鉄格子がはまっている。駄目で元々、何もしないよりはマシだと思い、実行してみたが　やはり駄目だった。ピクリとも動かない。

「　ッ！　くそッ！　ここから出せ！」

鉄格子を殴りつけた反動でバランスを崩し、アオイはタンスから落ちた。その拍子に、側に積まれていたファイルと服の山が、床に散乱した。埃まみれになったアオイは、舌打ちをしながらファイルを蹴り飛ばそうとして、目が釘付けになった。そのファイルの表紙にである。カツラの名前が書かれている。アオイはファイルをめくっていた。

住所、年齢、身長、体重……カツラに関わる情報が、事細かに書かれている。次のページには彼の免許証やキャッシュカード、診察券……が、几帳面にファイルされていた。アオイはもう一度ページを戻した。どうやら、この所持品の情報がまとめられているらしい。しかし、八雲大の学生という事は書いていない。

学生証はファイルに無かった。当然だ。温室でアオイが見つけた、今はルリが持っている。ルリは『探していた』と言った。その時はカツラが探していたんだと思った。しかし、それは違う。探していたのは、このファイルの作成者だ。そしてその人物は 1枚目の最後に『2005年4月30日、処分 タチバナコウヘイ』と記されている。散らばっている他のファイルも手に取った。カツラと同じようなものが29件ある。そして、最後には『処分』とある。

無表情なタチバナの顔が脳裏を過ぎった。頭に浮かんだ『処分』の意味を、アオイは即座に否定したが、ファイル、そして この男物の衣類の山はどう説明すればいい？ やけに細身のものもある、特注サイズまである。明らかに一昔以上前の服から流行りのものもある。タチバナの所有物とは思えない。服はキツチリ30センチある。つまりこういう事か。タチバナは30人を『処分』して、遺品をここに隠した。しかもご丁寧に殺した人間の情報をファイリングしているとは……奴は狂っている！ そして、31人目は「ごめんください。タチバナさん、いらつしやいませんか？」遠くから聞き覚えのある声が聞こえてくる。アオイは明り取りに向かって叫んだ。

「カエデ！ 俺だ、アオイだ！ 助けてくれ！」

玉石を踏みしめる音が近づいてくる。

「ここだ！ 多分 蔵の中だ！」

「アオイ？ 本当にアオイなのか？」

カエデの声がすぐ外で聞こえる。アオイは鉄扉を叩いた。

「ちよつと待つてろ！ 家の人を呼んでくるから」

「やめろッ！ 呼ぶなッ！」

「何言ってるんだ？ 勝手に壊せるか！ 仮にも警官だぞ、俺は」
そう言いながらも、カエデの口調は何か迷っているようだ。

「考えてみてくれ！ どうして俺がこんな所に閉じこめられてるのか！」

「……もしかして、あの女に関係あるのか？」

「女？ ……ルリの事か？ ある。大ありだ！ この中を見ればわかる！」

「ちよつと待ってる！」

カエデの気配が消えた。良い所にカエデが来てくれた。これで外に出られる。助かった

甲高い金属音が蔵の中に響いた。一度。二度。三度。四度目で鍵が外れる音がして、鉄扉が開いた。薄暮の闇の中からカエデが姿を見せた。

「おい。何でこんな所にいる？」

それはアオイ自身が知りたい所だが、とりあえず、状況を説明せざるを得ない。ルリをここまで送り、カツラの学生証を温室で見つけた。そして、タチバナが帰ってきて、気付いたらここにいる

話していく内に、カエデの表情が硬くなっていく。カエデはライターで壁を照らし、電機のスィッチを入れた。数回瞬いて、蛍光灯が暗闇を振り払う。カエデは床に散乱している衣服やファイルを手にした。

「これは……」

カエデはファイルを見つめて息を飲んでいる。

「タチバナは人を殺している。カツラも犠牲になってる。ルリも共犯だ。彼女は言った。『カツラは側にいる。他人には見えない所に』」
つて

食い入るようにファイルを見つめていたカエデが顔を上げた。アオイは続けた。

「つまりこういう意味だと思う。殺した男達はこの蔵に埋めた」
カエデは唇を摘んで宙を見つめた。

「タチバナとあの女は一体どういう関係なんだ……」

「父親の罪をルリが庇ってるんだろ？」

カエデは写真を取りだした。随分古ぼけた写真だった。女が写っている。ルリに間違いない。アオイはカエデを見返した。

「タチバナに娘はいない。それどころか、ルリという女の存在自体怪しい。戸籍が無いんだよ」

「何言ってるんだ？ 現に彼女はタチバナの事を」

アオイは写真を握りしめていた。

「この写真は？」

「30年前、この先の旧道で死体遺棄事件があった。その被害者、本城サツキだ。ルリに会って、どこかで見た気がしてた。気になつて少し調べたら、それが出てきた訳だ」

そうか。それで、真偽を確かめにやって来た訳か。しかしよく似ている。というか、瓜二つだ。

「それ手紙……か？」

カエデがシャツの胸ポケットを指さしている。何時の間にか便箋が入っていた。見ると筆跡が乱れている。急いで書き殴ったようだ。『貴方がこれを読んでおられる頃、私は茶毘にふされている事でしよう。どこのどなたか存じませんが、誠に申し訳ない。大変な事に巻き込んでしまった。しかし、ここまで来て邪魔される訳にはいかんです。その中ならばおそらく大丈夫でしょう。無事に発見される事を願ってやみません。』

このような事をお頼みする立場に無いのですが、一つ最後の願いを聞き届けて頂きたい。桐ダンスの中に全てを綴ったノートがあります。それをしかるべき機関に提出してもらいたい。勝手な頼みとは重々承知しております。ですが、何卒お願い申し上げます。

タチバナコウヘイ

カエデは既に件のノートを手にして、斜め読みしている。

「何を書いてあるんだ？」

カエデがノートを超越す。茶色く変色した古い大学ノートだった。

全部で10冊ある。日記のようだ。一番古いものは30年前に遡る。最初の数ページは乱れた字で綴られている。文面からすると、相当興奮しているようである。

『これは大変な発見だ！ 信じられない！ 幻を見ているのではないか』

タチバナは当時35歳。大学で講師をしながら、昆虫の研究に没頭していたらしい。ある日、偶々『峠』を散歩していて何かに出くわしたようだ。

『最初は化石かと思った。しかし、よく見ると違う。動いている。生きている！ その幼虫は青く透き通る石の中で生きていたのだ！』

発見した本人が興奮するのも無理はない。これを読んでいるこちらも、にわかには信じがたい内容だった。

『父の言っていた事は本当だった。あの女修験者が大陸から持ち込んだ虫は生きていた。とすると、父が狂い死にする間際まで口にしていたあの光景は本当なのか？ 私は 見てみたい！ その光景を見たい！』

以後、ノートには件の幼虫に関する観察記録が綴られている。タチバナは自宅に虫を運ぼうとした。しかし、持ち帰ると石は濁り、中の虫は消えてしまう。どうやら、虫は『峠』でしか生きられないらしい。『峠』の特定の場所に虫は群生し、ひっそりと生きてきたのだ。タチバナは毎日のように通い観察を続けた。しかし、虫の数は徐々に減っていく。遂には全ての個体が消失するが、タチバナはそれでも通った。そして、ある日

『群落からそう遠くない斜面で少女を保護した。私の問いかけには反応しない。記憶喪失なのだろうか。虚ろな目で足下を見ているだけだ。その足下には長径1メートル程の繭玉があり、穴が開いていた。おそらく この少女が出てきた穴だろう。父の言っていた通りだ。虫はこの少女を宿主に選んだのだ。私は彼女にルリと名付け、蔵に匿って観察する事にした』

アオイとカエデは思わず周りを見回した。この蔵の中で ルリ

は暮らしていたのか。

『発見当初と比べてもルリの様子に変化は無い。どうやら寄生した段階で、虫の適応能力は格段に上がるらしい。思うに、件の修験者も何かに寄生させてここまで運んだのだろう』

ノートはしばらくルリの観察が続く。彼女は蔵の隅でうずくまるだけで、食事もなくに取ろうとしなかった。水だけは飲む。タチバナの試行錯誤が始まった。野菜や魚には見向きもしない。唯一口にしたのは肉類だった。それも、生肉を大量にである。肉に関する好みは無いしかった。

この頃、タチバナは自宅を知人に預け、引越をしている。無論、極秘裏にルリを連れて。そして、ノートの内容も観察というよりは、成長記録に変わってきていた。ルリの記憶が戻る兆しは無かったようだ。次第に生活に順応していく様子が窺える。それに関して、タチバナも密かな悦びを感じていたようだ。

その後もタチバナは引越を繰り返している。そして、少しずつルリと心が通っていく様子がノートから垣間見える。しかし、気になる記述が現れた。多い時には年に三度。少ない時は数年に一度。正確に言えば、年を追う毎に頻度は低くなっているが、不意に『処分した』とだけ記されたページが現れるのだ。全部で30件。これはつまり、ファイルの内容を示しているのだろう。ノートの最後にはこう書かれていた。

『私はルリの件の行為を「捕食」と位置づけた。一旦それが始まると、何人たりとも干渉出来ない。餌を巨大な繭に取り込み、内部で少しずつ吸収しているらしい。残るのは服や貴金属類だけだ。最初の「捕食」があった日に、全てを終わりにしていれば、その後の犠牲は出なかった。しかし、既に私の中の何かが壊れていた。最後に待ち受ける光景への好奇心なのか、ルリへの形容しがたい気持ちか、そうさせたのか。今となっては分からない。分かったところで私の罪は消えやしない。おそらく、もう「捕食」は無いだろう。既に最終段階に至っている。私は全てを見届けて償うつもりだ』

想像を遙かに超えていた。このファイルはタチバナの罪の意識の産物だったのだ。全てを失った犠牲者のせめてもの記録、という事だろうか。

「……サツキって被害者の遺体に虫が寄生したって事なのか？」

「おそらく。写真とノートを鵜呑みにすればそうなる。ルリが年を取らない理由も分かったような分からんような　その前に、タチバナに確かめる必要があるな」

焦げ臭い風が入ってきて、二人は顔を上げた。カエデは血相を変えて飛び出していく。アオイもそれを追う。

母屋の1階部分は既に炎に包まれていた。火の勢いが尋常ではない。匂いからするに、灯油を大量に撒いたらしい。2階のベランダにルリとタチバナの姿が見えた。ルリはこちらに気付いて、寂しそうな笑みを浮かべて頭を下げた。

ルリの頭部が急激に膨れあがり、そして弾けた。その場所からビリジアンブルーの花びら　いや、無数の蝶が上昇気流に乗って夜空に溶けていく。次第にその量は増していき、さながら青白い光の帯である。

「青いキツネ火……」

アオイはボソリと言った。六十年前の事件も、もしかしたら動かなくなつたルリの抜け殻をタチバナは抱きしめた。そして、全てを炎が覆い尽くす。一片の緑青の花弁が降ってきて、アオイの手のひらに止まった。碧く澄んだ石の欠片はひどく冷たかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5064f/>

緑青吹雪

2010年10月8日15時21分発行